

# 江戸期の教育を現代に生かす



たかはし やすし  
**高橋 靖**  
みと  
水戸市長(茨城県)



みなかわ おさむ  
**皆川 治**  
つるおが  
鶴岡市長(山形県)



多久市

恵那市

鶴岡市

水戸市

司会・コーディネーター

おおたに もとみち

**大谷 基道**

獨協大学法学部教授



よこお としひこ  
**横尾 俊彦**  
たく  
多久市長(佐賀県)



こさか たかね  
**小坂 喬峰**  
えな  
恵那市長(岐阜県)

藩校、郷校、私塾、寺子屋などが地域に存在し、独自の教育が展開されたことで、高い教育水準が保たれていた江戸時代の日本。地方文化の形成や発展、明治以後の日本の近代化にも貢献しました。こうした江戸時代の教育を現代に生かそうと、各自治体においても、当時の教育施設の保存改修、地域の人材育成に尽力した先人の顕彰などを通して、未来を担う子どもたちの育成、市民の生涯教育の推進など、さまざまな取り組みを進めています。

WEB会議形式の今回の座談会では、皆川・鶴岡市長、高橋・水戸市長、小坂・恵那市長、横尾・多久市長にご参加いただき、各地域に根付いている教育の歴史や特徴、人づくりを中心とした取り組み、同様の教育遺産を持つ自治体間での学び合いの効果、今後の目標などについて幅広くお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

江戸期から受け継がれる地域の教育遺産

**大谷** 明治に入ってから、日本が急速に近代化を実現できたのは、高い水準にあった江戸期の教育が背景にあったからだといわれています。それでは、各地域に息づく江戸期の教育の伝統や特徴、それを生かした取り組みについてお話しただきたいと思います。

**皆川** 鶴岡市は四季折々の豊かな自然とともに、先人が築き上げた歴史文化が根付いている

藩校致道館の教育精神は、鶴岡の教育の原点。その伝統や教育風土は時代を超えて受け継がれています。



皆川 治  
鶴岡市長(山形県)

まちです。元和8(1622)年に入部し、明治維新まで鶴岡を治めた旧庄内藩主酒井家その礎を築きました。令和4年に酒井家庄内入部400年を迎えることから、今年からプレ事業としてさまざまな事業を行っていく予定です。この庄内藩における人材育成の中心的役割を果たしたのが、文化2(1805)年、9代藩主酒井忠徳により創設された藩校「致道館」です。当時、諸藩が幕府の方針に従い、朱子学を藩学としていた中で、庄内藩は荻生徂徠が提唱する徂徠学を採用し、生徒の個性に応じてその才能を伸ばす「天性重視・個性伸長」が重視されました。現代に通じる、一人一人の子どもたちの個性を尊重する教育が既に200年以上前から、この鶴岡の地で実践されていたのです。

こうした教育風土は庄内藩士の精神的支柱となり、明治以降の当地域の産業振興にも影響を与えました。代表的なものが、近代化の礎となった絹産業です。戊辰戦争において、旧幕府側につき新政府軍と対立した庄内藩は敗れましたが、恵那市の先人・佐藤一斎の教えに影響を受けた西郷隆盛の計らいで、寛大な処分が下されました。

その後、当時の主要な輸出品目であった生糸の生産を目指し、旧藩士たちは刀を鋏に持ち替え、開墾事業に従事し、日本最大の蚕室群が完成しました。今では養蚕から製糸・製織・精練・染色まで、絹織物の一貫工程が現在も残る唯一の地となっております。このストーリーは「サムライゆかりのシルク 日本近代化の原風景に出会うまち鶴岡へ」として、平成29年に日本遺産に認定され、致道館もその構成文化財の一つに位置付けられています。

**高橋** 水戸の歴史を象徴する人物として、徳川光圀、いわゆる「水戸黄門」を思い浮かべる方は多いと思います。確かに、光圀はその後の水戸学の形成につながる「大日本史」の編さんをはじめた名君ですが、光圀が活躍したのは1600年代です。今まさにNHK大河ドラマ『青天を衝け』で幕末期の水戸藩の動向が詳細に描かれています。幕末には、水戸の歴史の真骨頂は、この幕末にあるのではないかと考えています。

その幕末に9代藩主徳川斉昭によって建てられた教育遺産が、今でも市内に残っています。藩校「弘道館」と「偕楽園」です。弘道館は学問・修練の場であり、偕楽園は梅林に囲まれた癒やしの場。一見すると対照的ですが、両施設は「時には厳格に、時には寛容に生きるべき」という斉昭の「張弛」という思想により、一対の施設として開設されました。分かりやすく言



藩校致道館にて論語の「素読」を体験する子どもたち(鶴岡市)

徳川斉昭をはじめ、  
先人たちが残した言葉を通して、  
子どもたちには郷土を愛する  
気持ちを育んでもらいたい。

高橋 靖  
水戸市長(茨城県)



例えば、緩急のバランスを取ってこそ、人は成長し、まちは発展していくということなのです。この考え方は、今の水戸市のまちづくりや人づくりにもしっかりと受け継がれています。

現在、水戸市は、本市同様に近世の教育遺産を有する足利市(足利学校)、備前市(閑谷学校)、日田市(咸宜園)と協議会を組織し、世界遺産登録を目指す活動を行っています。平成27年には4市で申請を行った「近世日本の教育遺産群

「学ぶ心・礼節の本源」のストーリーが、日本遺産の第1号認定を受けることができました。

**小坂** 恵那市は、江戸時代末期の儒学者、佐藤一斎の出身地です。一斎が記した「言志四録」は、指導者のための聖書とも呼ばれ、新時代のリーダーたちに多大な影響を与えました。皆川市長がおっしゃられたように、西郷隆盛もこの書物に傾倒していたことが知られています。

言志四録は1133条に及ぶ教えですが、中でも有名なものが、「少にして学べば則ち壮にして為す有り、壮にして学べば則ち老いて衰えず、老いて学べば則ち死して朽ちず」という教え。少、壮、老と、生涯学び続けることの大切さを説いた「三学の精神」です。

恵那市では、前市長時代の平成22年にこの三学の精神を理念とした「恵那市三学のまち推進計画」を策定し、翌年には生涯学習都市「三学のまち恵那」宣言を行いました。以来、全市を挙げて市民三学運動を展開しています。

市民三学運動は「書に学ぶ」「求めて学ぶ」「書で活かす」の三つの柱で構成されています。「書に学ぶ」は、文字通り読書活動の充実です。公益財団法人「伊藤青少年育成奨学会」から寄贈を受けて平成19年に開館した中央図書館を核に、ブックスタートなどの取り組みを進めながら、読書のまちづくりを推進しています。また、「求めて学ぶ」として、市民講座「市民大学恵那三学塾」を開学するなど、さまざまな学習機会を市民に提供しています。同時に、「書んで活かす」機会をつくらうと、生涯学習とまちづくりの拠点施設として、旧公民館を「コミュニティセンター」に衣替えるなど、市民の活動拠点を整備してきました。



第9代藩主徳川斉昭の手で天保(てんぽう)12(1841)年に創設された弘道館・正庁(水戸市)

**横尾** 多久の4代領主・多久茂文は、元禄12(1699)年、後に「東原産舎」と呼ばれる学問所を開きました。特徴は、武士の子弟のみならず、学ぶ意欲や志があれば、平民にも広く門戸を開いた画期的な教育機関です。さらに、「廟を視る者に敬い心が湧くように」との志を立てた茂文は、儒学の祖・孔子を祀る「多久聖廟」も宝永5(1708)年に創建しました。国内に現存する中でも、とても瀟洒な孔子廟です。学問所の設立は全国的にも早く、佐賀藩校「弘道館」よりも早かったという史実を含め、茂文の先見性や学問への情熱に、私自身も敬愛の念を強く抱いています。実際、明治期には東原産舎から、日本初の工学博士である志田林三郎、石炭王の高取伊好、明治の法律編さんに携わった鶴田斗南(皓)ほか、日本の近代化や郷土のために尽くした人物が、数多く輩出されました。



「書に学ぶ」「求めて学ぶ」  
「学んで活かす」を柱に、  
佐藤一斎の教えを生かした  
「市民三学運動」を  
進めています。

小坂 喬峰  
恵那市長(岐阜県)

こうした伝統を受け、多久では今も学校教育はもとより生涯学習にも熱心です。東原座舎の教育精神は現在の学校教育にも受け継がれ、市内の義務教育学校はいずれも校名に「東原座舎」を冠しています。また、江戸期の学びの継承を象徴するのが「論語カルタ」です。全校で学校を挙げて論語カルタに取り組み、子どもたちは楽しみながら論語の章句を覚えます。私もわが子が小学生の頃、共に論語カルタに

興じましたが、4年生になるともうかないません。高学年ともなると100枚のカルタの言葉を正確に覚えていきます。子どもたちの記憶力、集中力に感心させられます。覚えた論語は着実に子どもたちの頭と心に刻まれるようで、学校の運動会・体育大会スローガンを募集すると、子どもたちから論語の名言が数多く出てきます。

から、水戸市の小中学校では「水戸教学」という名称で、水戸の歴史や先人たちの言葉を学習しています。また、座学にとどまらず、地域活動やフィールドワークを通じて、郷土愛を醸成する取り組みも重要です。水戸市でも50万人を超える観光客が訪れる「水戸の梅まつり」において、子どもたちが主体的に偕楽園の案内や、斉昭の言葉の紹介など、観光客へのおもてなし活動を推進しています。

### 未来を担う子どもたちの育成に向けて

**大谷** 今、横尾市長から多久市の論語教育についてお話がございましたが、江戸期の教育の伝統を、どのように未来を担う子どもたちの育成に生かされているのか、それぞれの都市の取り組みをお聞かせください。

**皆川** 「天性重視・個性伸長」に象徴される致道館の教育精神は、鶴岡の教育の原点であり、時代を超えて今なお受け継がれています。教育委員会発行の冊子「親子で楽しむ庄内論語」を全小生に配布していることに加え、各校でも論語を学ぶ機会を設けています。また、致道館では、論語に親しみながら、伝統の学風に触れる機会を提供しようと、幼児から高校生、また企業の

**小坂** 恵那市では、生涯学習の基本理念として位置付けた「三学の精神」を子どもたちの教育にも生かしています。特に熱心に行っているのが、佐藤一斎出身の恵那市岩村町にある市立岩いわむら邑小学校です。言志四録を授業で取り扱ったり、給食の校内放送において、言志四録から選んだ言葉を子どもたち自身が分かりやすく意識して伝える取り組みも行っています。また、岩村町の市街地では一斎の言葉を広めようと、以前から言志四録の言葉を木版などに掲示していますが、岩邑小学校の子どもたちはこれを現代語に訳して、QRコードで読み取れるようになるなど、地域と連携して、観光振興にもつながる取り組みを推進しています。

**高橋** 徳川斉昭をはじめ、水戸の先人たちは、さまざまな言葉を残しています。そうした言葉を通じて、先人たちが持っていた先見性や視野の広さを子どもたちに学んでもらい、郷土を愛する気持ちを育んでもらいたい。そうした観点



木版に掲示された「言志四録」の言葉の現代語訳をQRコードで紹介する小学生(恵那市)

地域としてさまざまな課題に的確に対応するためにも、「人間力」の育成がこれまで以上に重要になってきます。

横尾 俊彦  
多久市長(佐賀県)



研修として、漢文を声に出して繰り返し読む「素読教室」を行っています。また、1400年の歴史を持つ「出羽三山」、約500年前から伝承される国指定重要無形民俗文化財の「黒川能」、わが国学校給食発祥の地である「大督寺」など、本市の歴史ある資源は、400年前から現在も鶴岡に住まわれている旧庄内藩主酒井家が代々大切にされてきたものであります。城下町の伝統と藩校致道館の教えが残る教育風土などが、本市のまちづくり・人づくりの基盤となっています。

**横尾** 多久市でも、多久の歴史や先人の生き方などを学ぶ「多久学」を学校教育で実施しています。さらに、人間力向上の一環として学校のトイレ掃除、黙掃にも力を入れています。掃除は心も清らかにしますし、謙虚さや感謝が芽生え、細事に気付けるようになります。

江戸期の東原庵舎では四書五経はもとより兵法や天文学、外国語など、新しい学問の習得を含め、「実学」に注力していました。今の時代に必要な実学は何かと考えると、やはりICT教育は欠かせません。その観点から多久市ではいち早くICT教育環境整備、ICT支援員配置などに努め、先駆けたICT教育を積極的に推進しました。とはいえ、予算も厳しく単独ではかない難いので、全国ICT教育首长協議会を立ち上げ、文部科学大臣ほかに未来志向で世界に通用するICT教育充実を提案要望もしています。GIGAスクール始動となり感謝しています。

**広域連携がもたらす学び合い、助け合い**

**大谷** 地域に根付いている教育遺産をまちづくりに効果的に活用するためにも、自治体間の広域連携や学び合いは必要だと思いますが、いかがでしょうか。

**横尾** 郷土の歴史や文化を地域住民が中心となって掘り起こすことは、シビックプライド醸成にも非常に大切だと思います。他地域と交流し、啓発や知的好奇心の高揚につながれば、さらに新たな気付きも期待できます。江戸期の儒学者も相互に人物交流をしています。私も恵那市、水戸市を訪ねて歴史や文化を拝見いたしましたが、多くの示唆や啓発をいただきました。



多久市の小学生は、「論語カルタ」を通じて、楽しみながら論語を学習(多久市)

**高橋** 私も同感です。先ほどご紹介したように水戸市では、足利市、備前市、日田市と連携し、世界遺産登録に向けた活動を行っています。いずれの都市とも交流させていただく中で、論語教育の展開(足利市)、国宝施設の保存の在り方(備前市)、歴史資源を生かした景観形成の方法(日田市)などを学ばせていただきました。確かにそれぞれの自治体間の距離が遠く、行き来がしづらいという事情もありますが、学び合いの効果や連携の目的を考えると、それは交流の妨げにはなりません。

**横尾** 交流により市長同士の人間関係も深まります。そうした人間関係は、いざという時にとっても重要になります。多久市は令和元年8月豪雨で激甚災害指定となる甚大な被害が発生しました。復旧復興を的確に進めるには多数の人材確保が必須でした。そこでご縁のある首長の方々に相談し、20人ほどの職員派遣をいただき

ました。実に有り難いことでした。ふるさとの先人を顕彰し、まちづくり・人づくりに生かす「櫻鳴協議会」のご縁でも交流させていたでいる恵那市の小坂市長からも、職員派遣を含め、ご支援いただきました。

**小坂** 派遣する立場から申し上げると、職員を学びに行かせているという側面もあります。災害の現場を実際に見て、復旧活動に携わること、得難い教訓を得て帰ってくることを期待しているわけです。その経験はいざ、自分たちのまちが被災したとき、必ず生きてきます。災害対応はもちろん、教育遺産の活用策を含めて、自治体間連携による学び合い、助け合いは大きなメリットだと思います。

**皆川** 鶴岡市では山形県との誘致活動が実を結び、平成13年に慶應義塾大学先端生命科学研究所が設立されました。以来、ここから多くのベンチャー企業が生まれるなど、地方創生のモデルといわれております。本市は、昨年SDGs未来都市に選定されておりますが、誰一人取り残さない、SDGsの実現を目指し、伝統と創造を伸ばし発展していくために、学術機関などとの連携も重要だと思います。



大谷 基道  
獨協大学法学部教授

## 「学び」を観光振興につなげる

**大谷** それでは最後に、現在、抱えている課題や今後の展望について、お聞かせください。

**小坂** 佐藤一斎は、全国の経営者から絶大な支持を受けておりまして、各地に顕彰会や勉強会などが発足しています。それだけのファンがいるわけですから、岩村町を一斎のふるさととして聖地化できないか、真剣に考えています。雑誌の「るるぶ」は見る、食べる、遊ぶの語尾に由来するといわれていますが、これからは見る、食べるに加えて、「学ぶ」が観光のキーワードになると思います。ただし、恵那市には江戸期の教育を象徴するような歴史文化施設がありません。日本のみならず、世界中から観光客をお迎えできるような、核となる学びの拠点施設の整備も考えていきたいと思っています。

**高橋** 今後の課題は、わがまちの歴史を普遍的な価値として、どのように国内外に認めていただくか、という点です。世界遺産の取り組みを通じて、いかにこれが難しいか、肌身にかけているところですが、しっかりと確立することで、さらなる観光誘客に結び付けていきたいですね。加えて、市外の方々にどう効果的に情報発信を行い、まちをアピールできるか、検討を重ねていきたいと思っています。

**皆川** 私も新たな観光の視点として「学ぶ」という要素は非常に重要だと考えています。コロナ禍の影響で、マイクロツーリズムという形で、エリア内の観光が注目されています。実際、鶴岡市では令和2年度、東北地方からの修学旅行の受け入れ件数が大幅に増えました。鶴岡市は国内最多の三つの日本遺産を有し、江戸期の教

育遺産を含め、さまざまな学びの資源があります。こうした資源を保存し、さらに活用・PRし、人材育成につなげていきたいと思っています。

**横尾** これからのまちづくりを考えると、SDGsとSociety5.0の対応は不可欠です。災害や感染症の危機管理も欠かせません。未来への活路を開く課題に的確に対応するには「人間力」が重要であり、人間力の育成がこれまで以上に重要です。まずは大人が立派に垂範し、子どもたちによい影響を与え、品格や礼節を重んじる気風を育む。江戸時代に重んじられた「人格の陶冶」や「修養」の気風をよみがえらせることも大切と考えます。大学入試に古典の基本書に学び修得できる内容も取り入れてほしいです。受験も学びも進化するはずですよ。



**大谷** 各市長のご発言をお聞きして、地域に根付く江戸時代以来の教育遺産は、市民の郷土愛・シビックプライドを育み、生涯学習や地域活動を促す、地域のアイデンティティそのものだということがよく分かりました。これからも、同じ資源をお持ちの自治体同士、あるいは他の主体とも連携し、人づくり・まちづくりを活発に進められることを願っています。本日はありがとうございました。

(令和3年6月9日、WEB会議形式にて開催)  
本コーナーは隔月掲載となります。次回は9月号に掲載予定です。